

氏名 栗田 佳彦
授与した学位 博士
専攻分野の名称 医学
学位授与番号 博 甲第 6079 号
学位授与の日付 令和元年 12 月 27 日
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻
(学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目 Clinical outcomes after the endovascular treatments of pulmonary vein stenosis in patients with congenital heart disease (Accepted)
(先天性心疾患に伴う肺静脈狭窄病変に対する血管内治療について)

論文審査委員 教授 伊藤 浩 教授 成瀬恵治 教授 王 英正

学位論文内容の要旨

<背景>

先天性心疾患に合併する肺静脈狭窄病変(Pulmonary Vein Stenosis: PVS)は進行性であり、非常に重症な病変である。心不全や肺高血圧につながり、生命予後規定因子である。この研究の目的は当院での PVS に対する血管内治療について評価を行い、適切な治療戦略を確立することである。

<方法>

2001年~2017年に岡山大学病院で行った PVS に対する血管内治療(バルーン形成術・ステント留置術)について後方視的に検討した。

<結果>

患者総数は31例(総肺静脈還流異常症24例、孤立性先天性肺静脈狭窄7例)、対象病変血管は53本。バルーン形成術のみは10例、ステント留置は21例(40血管(ハイブリッド: 29、経皮的: 11))に行った。生存率は PVS 発症から1年71%、5年49%。Bare-Metal stent を使用した症例群が生存率で有意に良好であった、またハイブリッドでのステント留置術は経皮的に行うより大きなステントが挿入できる利点があった。早期 PVS 発症、ステント留置前の重症 PVS がステント留置後の再狭窄のリスクファクターであった。ステントに対する再介入(バルーン形成術)回避率は1年50%、2年26%であった。

<結論>

より大きなサイズのステント留置、ステント留置後の繰り返す再介入が予後を改善するために必要である。ステント留置後のカテーテル治療を考慮したハイブリッドステント手技が長期的な開存性の確保に有用であると考えられた。

論文審査結果の要旨

先天性心疾患に合併する肺静脈狭窄症(pulmonary vein stenosis. PVS)は患者の生命予後を悪化させる病態であり、外科的手術やカテーテル治療による狭窄の解除とその維持が必須である。本研究は PVS 患者が豊富な岡山大学病院の特性を活かし、カテーテル治療による PSV の治療戦略の有効性を retrospective に検討したものである。その結果、できるだけ大きなサイズのステントを留置すること、そして外科手術とのハイブリッドステント留置術が長期的開存性の確保に有用であることを示した。PSV 患者の治療戦略を決定する上で重要な知見を得たものとして、価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位をえる資格があると認める。